談鋒資鋭　上

イ 曽 5
129
1

荒井堯民著

談鋒資鋭

此書ハ後世随筆中ニ論ズル処ヲ劄記シテ国字ニ和解シ世俗ニ解シ易カラシム又小説ノ奇事奇談等ヲ載スレバ大ニ学者博識ノ資トシ看ル人ヲ悦バシメ談鋒ヲ鋭クセシムルノ奇冊ナリ

全二冊

談鋒資鋭序

右手磨刀、左手撃鼓。刀不磨鼓不鳴。余嘗欲博捜幽討、以磨固陋之業也。又欲作枝葉文飾之辭、以鳴無用之説也。悠々十數年、刀不磨鼓不鳴。偶閲傅武仲之語曰、二志靡成、聿勞我心。於是憬然而悟、翻然而悔、自咎其始用心之太錯矣。乃痛絶旁騖、以并力于文章。操筆展紙、昕夕呻吟、以鳴

門 1 書 5
號 129
巻 1
敬業館図書印
荒井堯民随筆
談鋒資鋭 二

其孟浪無用之言。如此者已數年矣。不知其高下徐疾。果能中天然之度耶。抑所謂今之古文。如舞蹈鼓者耶。未可知也。余友荒井堯民。曠達不羈之士也。平生甚不喜儒家理窟之語。又不肯作枝葉文飾之辭以自鳴。終日矻々。但從事于雜家。瀏覽泛渉。以資其談鋒而已。然漸摩之久。其學甚富。其聞既多。其力量殆亦不可當也。頃者

著一書。顏曰談鋒資鋭。欲鋟木以行諸世。問序于余。余受而讀之。凡古今來奇事異聞。靡不博捜而幽討。儲與扈治。浩々瀚々。莫可端倪。殆其獲之于陳氏之儲者耶。擷其精英。而掃其査滓。汰其沙礫。而揀其美金。獵取之餘。群無留良。其伎倆殆亦不可測也。嗚呼。此其果足以資天下之談鋒哉。余不可以不鳴吾鼓也。

文政己丑之夏五

晴軒散人大田敦撰

談鋒資鋭巻之上

江户　晴湖　荒井尭民著

書を擁する万餘巻なれば則百城を假るなし。李謐言行録

書數十巻あるときハ千駟にも易ず。劉晝 つねにいふ我ゝ數十巻の書世に行れバこれを齊の景王の千駟にも易まじ。

君子いはく其身後の名ほまれよりハなんぞ。當下流覧 書を多く見ることの適さるに志かん。されバ昔人の書を讀を以て悉く解ことを求めず。陶淵明ハ語言文字の外に楽みをえたり。

柳公権は銀の盃を主蔵に竊まるゝに然れども哂つて曰羽化して去るなるらん。張文定公は銀の器をその奴に盗まるゝそれを熟視て其事を問ず。斐行倹は瑪瑙の盤（外国を破し時得る所の品なり）を出して諸の大将に示す。誤つて軍吏に砕る。韓魏公は玉盃盤（錦を藉て案に置く）を出して。坐客此觴を亦誤て小吏に砕かるゝされども皆意に措ず。四公の汪度は褊心なるもの此去るを實に相萬々なり

劉伯龍は（南史に見えたり）少くして貧薄なり。武陵の守と

なりし頃貧尤なりし。常に左右を召て什一（金を耀し利足をとる術なり）を営まんとせし。忽一鬼撫手て大ひに笑ふ。遂に止ていはく。是を管子に聞く釜鼓満るときは人是を概す。（概ハとかきといふものにて斗の満るをかき払ふなり）人満ときは天是を概す。それ貧にして安んずることを知らば鬼の為に笑るゝ。富で足ることを知らざるときは天の為に概せらる。只よく貧富に安ずるものは天概を拋ちて処なし。鬼も亦いかゞせんぞ。揶揄（あざけりわらふ）は一向に滅し

小人は人主の欲に中ることを思ふ。其説を托する所は

く進むるのなる宋の侍読林瑀みづからいふ。易ニ洞くなるをかつていふ。仁宗の時ハ易の需ニ合しるを。需の象ニいはく君子ハ飲食宴楽すといへり。されバ此時運にかなふべきとて頻りニ宴楽して娯遊すべし。能く卦體ニ合して天下治るべしと。仁宗その説ニ駭き是を斥けり。向ニ陳随のものニ售しめん必を淫昏の忠讜となさん。又英宗の即位の頃著作郎甄傒継聖の図を献ず。天書を以て降聖の兆となし。油紫を猫子（由紫と猫子語相近きを也）の祥とし。再び御名

を折く。継照の義とまで語不経なるを以て悦びを人主ニ取らんとはかる。然とも英宗も直ちに其妖妄なるを怒る。中書ニ命じて官を削ぎ任を停らるゝもの。仁宗英宗の神識明覧のごとくなれば。又なんぞ明を指佞艸（続博物志ニいはく佞人を指す艸あり）ニ藉らんや。觸邪獣（続博物志ニ佞人ニ觸るの獣あり）に乞んや
成敬奇（唐人大理正）姚崇の疾を視て生る雀数頭を置き一々手づから執て是を放て曰。孫がいはく公をして速かに愈えしめん。又葦申（宋人光禄卿）王介甫の壽

を為しゐるといへ大籠に雀を貯へ客次に詰め笏を揩て籠を開いてゆく。相公(王介甫)一百二十歳ならん事を願ふ。兩人の諛媚笑ふに堪たる時を異にして轍を合せたり。姚崇ハ敬奇を悪むを聞ども。介甫ハ輩中を厭ふといへども聞を兩公の人品高下みつべし。鄭声を放つて佞人を遠ざくるなり志このむぞ。(堯民曰是ハ呂恵卿と安石と堂上にて新法の相談の時は王安国ながく堂下に笛を吹ゐる事ありその時の答也)平甫(安国)の一言ハいかなるも介甫(安石)が頂門の一針なり然れども則介甫ハ姚崇に慚ること遠し

殿に上りて相争ふこと虎の如く殿を下りて和氣を失なはず此君子ハ和して同ぜざるの證なり喜べば足を摩て以て相歡びいかれば目を反て以て相噬(王安石呂恵卿蘇軾の如く見へたり)是小人の同して和せざるの證なりはんざるに子瞻(東坡)が制する所の詞も荘子を本とせり喜べば則頸を交へて相靡怒れば則ち背を分て相踶(馬蹄の語)なりの語を取りて小人の状を小人の状を尽したり

韓退之(韓昌黎)が詩ハ悲ミ多く(韓退之の詩三百六十首の中哭泣の詩三十首あり)白楽天(香山)が詩

樂ミ多し（白樂天の詩二千八百首　酒をのむの詩九百首あり）そもそも詩ハ性情を理む
悲み多く樂み多く恐らくハこゝにあるべし
天聖の中侍中の馮拯薨ずその時人家にて一驢を生
ず腹下白毛にして馮拯の二字を成す是馮氏にて
金を以て贖ひけり又元和六年恵州の一娼を雷
に震せられて死しけり腋の下に朱書ありて
いはく李林甫毒虐にして權をほしいまゝにせ
帝命じて震死せしむ此二事ハ冥報灼然たり
人として骨まで毛のはえるもの[illegible]しも然るべき

林甫に於ては快とすべし馮拯ハ氣貌嚴重
にして當れる大臣の體を得たり何ぞ[illegible]謹
を得ることを知らず馮拯みづから奉ずること侈靡と呼
ばるゝともその家を儉陋にして被服も常のごとき
質なり此よりこれを推せば馮拯平生陰謀の
多きことを有ることを知るべし
陳恭公の毫に判ずる時人多く老人の圖を献じて壽
を為すその姪世脩あり扁船五湖の圖を献ず
功成名遂て身退くの賛あり恭公これを

喜びたまひて司徒を以て仕を致す。また韓侍
国の許に守たる時。人多く諛詞をなして壽を
為す然るに崔子厚ひとり詩を以て是を警め
末に挂冠高節莫因循の句あり韓持国さいさん是
を嘆詠したまひき少師を以て仕を致す古
への人は諷する事を忌諱ず。よくこそかまはず諷諫
を受るものも。栄名を謝する事を難しとせず君
し子ハ両ながら是を賢とす
蘇武の子前に事に坐せられて死す蘇武平恩侯に因

て語つて曰前に匈奴に在るの時。胡の婦ゆゑに一子
を産。通国といふを聞て金帛を致し贖かへす。
以て帰とあまて蘇武匈奴にて漢節を杖き臥起の
時身ハ艸野に膏するを艱しとせず。志あるより
獨り一の胡婦を絶し難し。情欲の際によく剛腸
を柔する事かくの如し。故に朱子の胡澹庵を
誡たる詩あり、
説者ゆゑにいはく。子房ハ黄帝老子に出て。孔明ハ申不害
韓非子に出づ。黄老たる時ハ則道に近し申韓

する時は則術に近し。黄老も必ずして為さゞる事なかり。志あるは申韓ハ必ず勝事を求む。是子房孔明の異なる所なり。されども一は赤帝（漢のこと）の興るに當てハ一に炎祚（同じくえんのこと）の燼を嘘き。漢の亡んとするを扶けし也。孔明の時勢ハ子房に較ぶれば難しかりし。一ハ漢を辟し軀を全ふす。一は軀を捐て漢に殉ず。孔明の心事を以て子房に較ぶれば。實なりとし。其人傑なる事ハ伯仲なるべし。

宋の蘇舜欽（子美）石延年（曼卿）の輩飲名五つ有り。いはく。鬼飲。了飲。囚飲。鼈飲。巣飲。一名（鶴飲）鬼飲ハ夜燭を燃さずして飲む。了飲ハ飲次第に挽歌し抠をひき哭泣して飲。囚飲ハ露頭にて圍坐して飲む。鼈飲ハ藁を以てみづから束首し引出して飲む。巣飲ハ木の杪に登りて飲む。またむかしより飲六ツを加ふ。曰く。踦飲。偷飲。跪飲。枷飲。牛飲。狗飲。踦飲ハ阮籍酒を飲むに二手聲を挙て一踦して是なり。偷飲ハ畢吏部の樽を盗む是なり（晉書 世說）跪飲ハ刘伶の跪き祝して酒を引（同上）是なり、枷飲ハ北齊の高季

式友人の消難を留て飲とし車輪に索をかけ。消難の頭を括らんとす。一輪にみづから頭を括る。仍て酒を命じて引満あまねく相すゝむ是なる。牛飲ハ商辛殷の紂王酒の池を作て船を廻し糟丘に牛飲するもの三千人餘これなり。狗飲ハ胡母輔之の輩室を閉じ酣飲するの時光逸衣を脱し露頭冠をとりし頭ありて狗竇の中より大に叫び遂に入りて飲ことを得たる是なり。瓊海の潮ハ半月を東に流れ半月ハ西に流る驪山の

温泉は半月ハ東に出て半月を西に出づる。東平の柏を西に靡き。漢の平思王国に在て京師に帰らんことを思ふて死しけるその塚の辺の柏みな西へなびくといふ摩頂の松を東に向ふ。玄奘法師松を撃て吾西に去て西に向つて長ずべし東に帰らバ東に向ふべしと云一年法師東に還りしぞ松すゝ東に向ふとかや大原の葭南を指たる。五代の漢の高祖劉知遠節度使たるの時大原の葭蘆さらんに生ぜ葉みな南を指す明年つひに帝の位につく曹娥の家の木を父の屍を抱しが如し明妃の家の艸ハ寒を経ておのづから青しいづれもこの艸木无情といへどもや妬婦津晋の劉伯玉の妻字ハ光明うまれつき妬みぶかし伯玉洛神を羨る事有て因て遂にみづから沈みて水神となる

は渡るものは皆衣を減じ粧ひを畧して後にありて渡る。
さなくざれば風波おこりて發る。醜婦は飾て
粧ひ渡るといへども其神また妬まず。唐の高宗
汾陽宮に幸せんとして、道妬女の祠に出づ。その
時并州の長史李冲玄俗に因て云、盛服して過る
ものは必ず風雷の災を致さん。となりて数万人
を發して別に御道を開く。狄仁傑時に知頓使（幸行の御用）
たりしが独いはく、天子の行八千乘萬騎なり。
雨師風伯も道を灑ぎ塵を清くす。何ぞ妬女の害

あらんや。遂に命じて是を罷む。高宗嘆じていはく、
真の大丈夫なるかな。といへどもまさに妬
婦を畏るるものは男子にあらざるなり。
水族に獺婦魚あり。（揚家の婦人性嫉なるの姑と不和にして溺死を化して魚となりその脂膏燈を燃せば鳴琴博奕を照せばよく光る。紡績をてらせば明かならず。是を見るときは人をして妬むらしむ）艸類に獺婦箴あり。（挂林に睡草有一名酔草と呼び亦獺婦箴と名づく）獣類にも獺婦と名づくるものあり。（山猪に似て小なり。喜んで禾を食ふ。田夫是をいとひて機軸織紝の器を田の畔へ掛く時はすなはち近づかず。安平七源等にある獣なり。竟民捘ずる）虫にも獺婦あり。（詩経の蟋蟀なり。絡緯といふ此虫なくときは秋冷なればそのうちに婦女は針刺の事をつとむるを催すなり。なく声きりはたりちやうと聞ゆるは古今集に見ゆ）蟲に守宮あり。蜥蜴は木に

これまた守宮なるを鬼車鳥といふものなり。九ツの頭なり獣にしも亦九頭なるものなり。王充曰蒼兕と言るハ水獣にて九頭なりといふ。論衡祥符元年に王欽若芝艸八千餘本を献ず。ふたゝび泰山の芝艸三万八千餘本を献ず。同じく六年に丁謂またく芝艸三万七千本を献ず。又九万五千本を献ず。それ芝英を泄さるを以て奇とし。豈それ多きを以て瑞となさんや。芝の生ずる信に千万を以て計らず。則まゝ野菜の類なり。安ぞ瑞と称するに足らんや野

鳥を以て鸞と為ざれ時に賈誼が賦安ぞ朝菌犬芝とに糞壌へ生ぜの且芝と名づけざらんや。

左傳に肓の上膏の下。杜預の注に肓ハ鬲なり。心下を膏となす。孔頴達の疏。凝ものを脂となす。釈ものを膏とし。その實は凝ものゝ。すべて膏といふ。是を膏といふハ心に連なるの脂膏なり。

廣州の舊族ハ皆竹節を以て屋となす。屢火災有て。宋璟人を教へて瓦を焼しむ。改て店肆を造る。てより又延焚の患なし。越の藩會城の民

居ちとく。葦萩を塗て垣とし火災に遇ば輙救ふことを。惜かな宗璟の民に燒塼を教て周垣と為させざりしぞ。（尭民按ずるに王元之の黄州竹楼の記をよめば。竹を以て陶瓦にかゆるもまた風趣ありと覚ゆ）滑州の史王軌奴の為に殺さる。奴その首を携て竇建徳に奔る。徳がいはく。奴主を殺すを大逆とす。我なんぞ是を納ざらんや。ただちに命じて奴を斬て王軌の首を返せり。さきに春秋莒僕（文公の十八年に見ゆ莒の太子）僕その君紀公を殺し寶玉を以て魯に来て奔る宣公これを受んとす季文子これを諫み竟に逐ひかへすをうけざるも義に同し。惜哉光武をさまたげて子密の頭を斬る事となりしに。（彭寵の蒼頭 後に寵を殺す）反つて封じて不義侯とせしぞ。さもその不義を知つて是を侯とせば此を下るその罪を義として上はその姧を賞するなり。建徳が此擧に愧ること多し

後漢の范升いはく。學ぶ約にせざれば必ず道に叛く。二語以て論語の注疏と為ることを。（博く学んで文を約せよと本文なり）寢衣（論語郷黨篇）は漢の孔安國の注にいまの被なり。宋史党進の傳党進忠武軍節たるの時。一日外より帰る。大蛇榻上の寢衣の中に臥を党進怒りてこれを殺食ふ安

国破を以て寝衣とするの一証なり。

鄧艾といふ蜀を破る江油の民すなはち艾か為に祠を立つ宋の洪咨夔これを毀て更て諸葛亮孔明の祠と為しその民に告ていはく仇讐に事て父母を忘るゝものなれど又汲郡に肖像の三仁に商紂を并せて四王とす此類を推せば淫祠の毀つべきことの多きを知る。

曹武恵始め生まて周年父母玩具を羅て是を試む曹武恵手に干戈をとる李顕忠の生るゝやその母難産を苦しむこと数日僧ありて過ていはく孕むところの子は奇男子なり剣と矢を以て母の切ところに置べしといふまゝ生る古語にいはく虎豹の子いまだ文をなさずして牛を食ふの気あり。鴻鵠のいまだ卵を孚ずして四海の心あり曹武恵の干戈顕忠の剣矢はみなその性生前に黙合する物なるか。古人弧を懸るの意の遠きを慮をしる。

凡そ鳥は三指前に向ひ一指は後に向ふ独り鸚鵡は両指し後に向ふ此鳥の名。梵経に載す慧性特に凡鳥なり

異なり貞観の中林邑より献せるものゝ如く言ふ。苦寒。
かくして帰ることを思ふといへども。韋臯の記せし所なり。
素より佛の名號ともいふ。（絶時 しまるとき）絶時これを焚して舎利
十餘粒を得たり。馴し養ふものありしにみて塔を建るといふ。
徐季龍管輅に問ていはく、世に軍事ある時はたちまち
感じて雉鶏先に鳴そのまけいかんなる。管輅對ていはく。
鶏は兌畜（兌は西方の金）なり。金を兵精なり。故に大白（星）揚輝あらば。
さるもち鶏なく。昔人鶏を聞ば起て舞く。
（祖逖 劉琨）その軍事に動くことを感ずるを知る大丈夫の

意は雄飛（後漢書趙温居つねに歎じていはく大丈夫まさに雄飛すべしいづくんぞ雌伏せん）ならんが有らば直
にそれ度に會所あらんと欲すればなり。
梁の武帝の坐にありて鱠を吐て魚（呉中の鱠残魚といふ是なり）となすことあり。
みな寶誌公なることを知れり。僧の志言を又爾なり。具齋
僧り食とに鱠を薦そのほか。志言并て是を食ひ漆
（をもむるを云）に臨みて吐けば化して小鮮となり羣泳して去る。（志言は前）
（知を）触を仁宗ありて黙して内侍を志言の所に遣し嗣を問ふ志言十三
郎の字を書て入れたり。後英宗なるして濮王の第十三子を以て入て
大統を継ぐ
さるあまと總すれば佛家顕化の象を示せるなり。又曹公は
坐して竿を投じて鱸を引。左元放慈なるを知るな

て呉の水象をまて亦て偶鯔魚の鱠に美なるを論
じ。亦象輙ち呉主の殿庭の中に就て。埳を作て水を
貯へ綸をたれて鯔を得たり。此を總るに仙家幻化顕化の術
まぼろしは変化を幻化とも有が如く無が如し
の象を示す。左慈魚を得てまた蜀中の生姜を致せり
片言にて獄を折へ論語子路相傳ていふ獄を片言に折るは斷を貴
なり。唐の歐陽詹論じていはく。かくの如く解さずして古へ
帝王の一人を刑するは三槐に循へ九棘を歷てもなほ
易からざるなり。いかんぞ片言を取て。かくの如く易う
せんや。蓋訟を聚の家は争てみなかつ勝ことを欲を因て

君子なるか或は妄に証を小人にしてよくみつから訟ふの
有ざるなり。片の言するや偏なり。偏言は一家の詞り
して最も折ち易からず。よく偏言にして折が故に貴に
足なり。歐陽生の一言人をして刑を省ことを知らしむ眞
に仁人の言なり。左傳にいふ仁人の言その利博し尚書呂刑の篇にいはく單
辞を明清にせよ。しかれば則片言獄を折の説なり。歐陽生いま
だ此にしかよだにらぬに援證を
歐陽詹の下和述にいはく。玉と石と菽と麦とに比するか
如し愚昧にて至るといへどもなほ或は此を辨ず楚王

むしろ玉人須臾の功を愛まんや一石を琢磨するを試ざるは實に奇珍を擲へ(奢靡を剪て。その塊桴(土を以てつくるの桴なり)土鼓(たいこ)上は犠軒(伏犠黄帝)に復らん事を欲し下は毀愛を懲さしめ下和が刖(あしきる)を為さる所あるを味はるが如し當時珠を投し璧を抵の朝にはあらざど何ぞこの議論なかるべきや

黄滔の文柏論(くろめがしは柏の木)にいはく天を西北に傾て列宿を拱さ。地は東南に缺て百谷を朝さ日は昃を以て蚤莫をなさ月は虧るを以て盈縮を見さ。固聖人の道は缺ざれば不朽に全からず(こゝろは孔子陳蔡魯衛の事なりまさしく以て天地日月の盈虚に象る猶これ文柏の刄を以て割なる器をなくし世に寶とするが如くなすを)黄滔の此論は殆ど竺乾(天竺のくにのこと)が缺陥(天地は缺陥の世界佛説なり)の旨に(嘿符を斯に即て推ば缺る所を以て完しと成し完き所缺を成ものの多し

范廷召(宋史本傳)飛鳥を悪み見る事なければ。此を射る居る所のかぎられ鳥。幾ど種を絶さ。李客師の忍(客師は李靖の弟なり鵲を殺さる鳥賊とよぶ唐書に見へたり)に同じ廷召また最驢の鳴を悪み此を聞毎に輙ち是を撃殺さ。王仲宣の驢鳴を好に相反せり(仲宣驢鳴を好む晋書世説に見ゆ)

世いまゐ假を以て真を奪ハざるハなし。妲己の假ハ比干の真を奪ひ靳尚の假ハ屈原の真を奪ひ宰嚭の假ハ伍員の真を奪ふ。三のものハ(比干屈原伍員)各その至真を以てその假を制せるとあたハずして(ことごとく)假の偶その勝ふ遭ひ。真の適その窮ふ際のみ。常ふ勝の権ハ心真此を操なりて石ハ破べし。然ども堅ハ奪べからず。丹ハ磨べし。然ども赤ハ奪べからず。(韓非子ニ出づ)姑くその他を論ぜるとなこのさ千載の下忠赤心を剖と(比干)よみし。孤憤の江ふ沈を(屈原)弔ひ。壮節の目を抉するを(伍員)追ハ其精神まさでふ天壌の間ふ奕々とれ

ばなり。誰か真の假を制せるとあたハずして。假なるもの(にせもの)て能真を奪とらんや

臧愚(宋刺史)少うして孤なりて常にその父を夢みるその父指示て曰いまゐまで老人星(南極星)はうまるべしと臧愚仰で此を見るふ黄明ふして潤大なりて竊てその祥なるを喜ぶ。その時壽星丙の方よりぞ丁の方ふ入る。因て名を丙と改む。後つひふ験なし。陳禹謨諸生たるの時景星を夢む光ア中庭を燭を覚て喜ふ[illegible]。おもへらく佳夢を得たりと。後まど竟ふ験なし。占夢

家かを毎こ以て事應に徴あれども。志られども亦尽く然らん。蓋しこそ験ある験なきも夢と称するゆゑんなるを。かくしてこそ一一験あらば名づけて夢となすべからずて。（堯民按に左傳に夢の徴あるを多し。聖人夢なしとは荘周の論なりて試みに吉夢をよろこむをなすのみ。凶夢あり逢ば戒め慎むべし）傳説いまだ遇ざるに先だちて夢に殷宗に發し。像形をさがしもとめて相肖るに。神それ先に合する者あるか。（堯民按に尚書の説命に出されども偽書なれば論ずるにたらざれ）（国語の楚語と呂氏春秋に出て史記高士傳等に詳なり）杜如海。薛收は既に没して夢に唐宗（太宗）に見えて。死と平生の如し。神それ亡びざる者か。盛なるのみ古へ君臣の交を始を善し終を喜ばしむるにや

あるべきなり。

漢儒（後漢晋の傳なり）趙岐が孟子の注にいはく允その圓なるといへ。則行き方なる時へもちまもち止る（方命虐民の注）此解をうとも明徹なり。嘗てもち深みに其義を廣むるに只圓なるものは則障礙なし。故に圓通といふ只圓なればきずなきもち缺損なし。故に圓満といふ只圓なればその機つねに活き。変化してかぎり。故に圓轉といふ。まさし笠乾（佛説）の教を圓覚に至て極る。大易の用を圓神にして妙を尽せ。天下の能事おわりきるる。

列精子高その侍者にかたりて曰。われいかん。侍者いはく公ハ姣く且麗なり。子高歩して井に窺へば。粲然たる悪丈夫の狀なりき。喟然として嘆じていはく。侍者我を阿るハ吾言齊王滑王に用らるゝ故なりき。万乗の主にして人此を阿ること甚多からん。呂氏春秋 また鄒忌その妻妾と客とにいつて曰我と城北の徐公の美に孰與なるや。君の美甚し。徐公なんぞよく君におよばんや。明日徐公来る。此を熟視するに自らおよばざること遠く如ず。鏡を窺てみづから照せば。またおよばざること遠く甚し。また齊王におゐて入て齊

王に見へて曰臣まことに徐公の美にしかざるを知る臣の妻ハ臣に私し。妾ハ臣を畏れ。客ハ臣に求ることあらんと欲し。皆臣を徐公より美なりといふ。いま国中にありて王に私し。王を畏れ王に求ることなきものなし。王の蔽るゝこと甚しからん。戦国策 それ鬼の好醜を辨し易きのみならず人言信ずることあらずして水鏡を以て決するも何ぞや人情を私なればなり。人論を品藻せんと欲るものは誠に水鏡の私なきが如くならば。則天下の真品見えて人主の壅蔽を徹せざる患なかる

なし竟民按づるに後漢の司馬徽徳操を水鏡と言品藻の私しなさなる

むしろ鶏口となれども。牛後となることなかれ。竟民按づるに此言は戦国策に出て史記にのせたり。あるひは国策に鶏尸と牛従とつくる。然れども鶏口と牛後にて協韻なれば史記を優れりとせり。

此れ對當するまで秋霜となすれども。濫羊となることなかれ。後漢書の廣陵思王荊の傳注に秋霜は物を粛殺し濫羊は制を人に受く

朽麥の蝶となり。朽葦の蛬となりて。腐艸の螢となり腐稲の蛩となり。物の朽腐することの猶よく変化す。人何ぞ

朽腐して弃るを甘ずるや

唐の高帝出て猟より帰る。大官天子のの羊を封するを見て

いはく罪なくして。死地に就く。死鹿を以て是に代よ。

此心は齊の宣王牛を愛するの心に同じ。惜かな子居孟子の字の説を進ることのなし。竟民按づるに猟を好めるはまさに禽獣を害すること多し高帝みづから此を察せざるは宣王の民の苦を察せざるに同じ

鷰雀堂にあるの喩は。人漢儒に出ることを知りて先秦までにも有ことを知らず。呂覧に季子の言を載て曰く鷰雀善を争ひよく一屋の下に処り子母は哺を姁々として相樂み自おもへらく安しと。竈突決して火のぼりて棟を焚く。鷰雀顔色変ぜざる是何

ぞや禍の己に及ばんことを知らざるなり。人の臣たるもの鷰雀の智を免るもの少なし　又男子五十にして好色は未だ衰へず　婦人は四十にして容皃前に改る　改るの容を以ては未だ衰へざるの年に侍る　此正后みづから疑ひ　支庶〔妾服の子〕の適を問ふ〔左傳〕の心あり　人漢疏に出るを知つて先秦すでに此あるを知らん　韓非の言にいはく　丈夫年五十にして好色はまだ解ず　婦人三十にして美色おとろふ　衰美の婦人を以て好色の丈夫に事ふ則身疎賤せらるゝと　子は疑はるゝとて後〔よつぎ〕とすべし。

古人のこと皆本づく所ある。北魏の簡平王浚が年八歳の時博士の盧裕にとうて曰祭神如神在すとあるは神ありとするや神なきとするや　對曰ありし　浚いはく神なくば　まさに祭神々在と言べし。なんぞ如の字を煩はさん。又唐の高定七歳の時尚書を読で湯誓に至る　父に問ていはく　いかんぞ臣を以て君を伐つ　父ありていはく　天に應じ人に順のみ　又問て曰命を用ゐざるは社に戮すとはある。〔堯氏按ずるに此の二句はまづ甘誓に出たり　湯誓は僞書なれば信じ難し　甘誓は夏后啓の有扈氏を征せらるゝなり〕豈人に順といはんや　父答る

をいへるぞ二子を夙慧にいへるなし。
説文より左旁を以て類とあして玉篇にまたり従ふ。右旁を亦
ありて類を以て相従ふ。昂青ふ精明の義いはゞ日の陰翳な
きものを晴となす。水の混濁せざる者を清となす。目の
よく明に見るを睛となす。米の粗糲を去るを精とな
す。此みな類を以て求むれバそのちなみ
呂覧に云。桂の下に穰木なし。又雷公の炮炙論にいはく。
桂を以て丁を為て木の中に釘ときは其木自ら死す所は
死す。昔し江南の後主清暑閣のまへ艸叢生せしを

患へ徐鍇その時桂屑を以て甎甃の中にかきしきば宿
艸尽く萎るれ。蓋桂の味ハ辛して性烈なる故なり。
伊尹を空桑より生き 呂覧に見ゆ 孔子もまた空桑より生る。
春秋孔演の圖にいはく顔氏徴在大沢の陂にあそぶ夢に黒帝あのれを請ひ
しむ。をそて往て夢に交る其時語りて曰汝乳するは必ず空桑の中にあい
くもん。覚きば則感るが如し孔丘を空桑より生む。首ハ尼丘山より類きゝ故
より以て名とす。又千寶いはく顔子ハ孔子を空桑の地に生て（いまの空竇と名
づく。魯の南山空竇の中水なし祭る時に當つく掃て告きば輙ち
清泉なりて石門より出づ以て用を周くするに足る。祭て訖きば泉を枯る
今の俗女陵山と名づく。○尭民按ずるに孔演の圖も緯書なり千寶の捜神記と
とより先聖を侮蔑せるなり。近し是等の言を用ひ無なる。又可たのしみ
まじ異聞に
備ふるのみ。空桑ハ地名にして樹にをいはまで。又樹より生るゝ
者いふも王梵志不可罕なれなり 隋の王徳祖の家に林樹

癭を生ずる事ありて。大いさ手の如し。三年を経て。その癭く
ち爛る。その皮を撤きみれば。遂に一孩児あり。因て収め養ふ。
長じて梵志と名づく。元の畏兀児に（地めいなり）和林山といふ有。二
水出づ。禿忽刺といひ。薛霊哥といふ。先の時神光此樹に降ること
両河の間に在て。人その所につきて此を候へば。樹癭を生ず。
妊る状の如し。これより光てかゝる其後など
経て癭さけて嬰児五を得たり。土人収めてこれを畜ふ。
その最も稚なるを不可罕といふ。長して壮にして遂に其
地の君長となる。又竟陵の僧水辺にて嬰児を得て育

つゝ弟子となし稍長じて。笠に因て姓を得させたり。
陸羽となれり。（笠ハ鴻漸陸とあり。漸の卦を得る也）三児の生る水源木といふべし
虞舜の孝感じて。三足の烏その庭に集て。曽参の孝かん
じて三足の烏その冠に華る。（参このとき瓜たけを鋤く）
江の深こと五里海の深こと十里（補齊記）河の潤ひ九里（列女伝）海の潤ひ
て千里。（公羊伝○尭民按るに河潤九里沢三世に及ぶとは荘子列禦冠の篇より出たり。）
孔子は魯を去るとき。象環五寸を佩られ。その文理なるを
言環は循て窮りなきのるべし（古礼記）といふ又孔子の宗国を
忘れず。魯を去るとき環を佩るはその環召の思ひ有

るが故なり。堯民按ずるに春秋の世。大夫命を境にまちうちの主君より環をたまへ国にかへり入る。玦をたまへば意を決し国を去るなりと。

大暦の中（唐の代宗）に乞児両手なきものの足を以て筆を夾み経を写す。（段成式言）天復の中に婦人半頭なきものの床に坐して手を運し麻を緝す。（中朝故事に黄巣の冠京に入る時一の老婦人賊の為に傷られ鼻より一半已上刃に随て去る。人ありて薬を以て是を療し死せざることを得たり後床に坐して麻を緝を手を運ぶてもなれて熟せしといふ。）天聖の（宋の英宗）中婦人両臂なきもの足を以て衣を繋ぎ面を洗ふ。（友會談叢に曰一の婦人ありて全く両臂なし両肩より削が如し頭髪を梳る毎に右足に櫛を夾み左足にて髪を綰ね及び衣を繋ぎ面を洗ふこと亦如くの如し便捷なること両手あるものに異ることなし。銭を擲ちて贈るものあれば則足を伸して縄に綰ぬ。略又景徳の中一の婦人双臂なし両足を用ひて鞋片くつを縫刺ぬひきて織致凝滞なし。なきものにて手なきも足より為と相おなし）此みな手足の形ちを具せざることなしといふべし。

能く手足の用を廃ぜ彼を直に心を以て運なすの故なり。荘子（徳充府の篇）に叔山无趾いはく猶足より尊きものの存するあり（斉物論）心の死を哀んで形ちの死するを哀むことなきのみ。

世の人長桑を扁鵲の師なる哉知りて、また荘生の師たることを知られず。また荘生を下を漆園の吏とあるを知りて上にある人にして天游（荘子太宗師に心に天游ありといふ）あるものを師とし（真誥に荘子長桑公子の微言を授）太極闡編郎に補せられし事をあらば荘生をいまだ（くられを荘子いふて抱犢山に隠る北育大丹を服し白日に天に升る太極闡編郎とある注にいはく長桑は則扁鵲の師なり。世の人苟くも荘生如くの如き

そのと知らば其書いよく重んずるに足なり○尭民按ずるに真詣ならぬところ
無稽の説なり荘子必ず白日に天に升らば荘子の本意を王荆公の論にて
明白なり荘子千載の知
己は荆公といふべし

厚貲を握るものは必ず厚奉を享すまて厚奉を享るものは
必ず厚貲を握らば豈天の寔に此を制するや然らざればなん
ぞ臨沮の鄧生筋を動かして骨哽するや 廣古今五行記にいふ梁鄧差は南郡臨沮の人なり。家大いに富む道なく估人に逢先に相識ならば道の辺に相對して食ふ二人すく甘美を羅布して鄧差を呼びともに飲を鄧差いろく曰君二人を見るてし游行の商估いまおい豊なるに何らぎ何もきどまかりに志るるや估人いふく寸光を惜なし人生の世に在る身口のさめに止るのみ臨沮の鄧差の平生守銭の奴とあるが如くなるなぎ鄧差を姓名を告き黙然として帰る家に至りて鶩を宰りて以てみづから食ふ筋を動し骨を嚥て其骨喉に哽て死れ。

相州の王叟も陳物を 陳齎の物 止めく腸に充るゝ。原化記にいふ天寶北中相州の王叟は鄴城に家して粟を積むこと万斛に近し。夫妻ともに陳物を食ひ。總に以て腸に充て豊なるを求めず荘宅ともに廣し。客二百餘戸あり。王叟つねに客の方に巡行を忽ち一客食せるの時盤飧豊腴なり王叟その業を問ふ客の曰く五千の資本あり日を逐て利を食んで其本を存すその餘は望まんや。故に衣食足ことを得るなり王叟遂に大いに悟りて帰りて妻に謂て曰彼の人小なれどもその利を得て以て身に充つ吾ともに財を積こと巨万然るも衣食は陳敗を以て誰ふあくらん遂に倉庫を発て其食味を恣にすることにし数日ならずして夫妻ともに夢中に亀の為に録せられ枷鎖を被て禁繋せられ鞭撻むちうちとも至るといふ此人妄に軍糧を破ると夫妻ある日尋て死す。その時官軍安慶緒を相州に圍む悉く其稟をいだして以て軍馬に供す。又胡訥聞見録の梓潼の民陳氏のことと同じ

何曽 晋人 の日々に萬銭を食し。任愷の一食せるに
万銭富ぐ豪侈あるが如きは則ち天の特に厚くせる所に
て常理をもて測るべきにあらず。

孟施舎を曽子に似たり曽子の勇は子襄の語にて見られ。

きそに較著ならずして疑はし獨り北宮黝を子夏に似たりとかり。子夏は孔門に在てはいまだ勇を以て著はれしを聞ず。母乃擬する所その倫に非ず。たゞ韓子を見て子夏の勇を知ることを得るなり。子夏かつて公孫悁と勇を衞の靈公の前に論ず其言にいはく吾かつて子と君に從ひ西趙簡子に見ゆ簡子披髮矛を杖て我が君に見ゆ我を十三行の後に从ひ趨して進て曰諸侯の相見ゆる朝服せずんば有るべからずと。若朝服せずんば行人卜商まさに頸血を以て君の服に濺がん朝服に及して我

君に見へしむるは子なるか我なるか公孫悁いはく。子るなり。子夏の曰子の勇我に若ざる一なり又子と君に東の方阿に至て齊の君に遭ふ齊の君茵を重て坐し吾君單茵にて坐し。その時我十三行の後に从ひ趨り進で其倨傲を諫て其一茵（一枚のしとね）を揄て此を去る者は子か我か公孫悁いはく子なり子夏いはく子の勇我に若ざることニなりまた子と君に圃中に從ひ。是においてて両牡寇肩（猛獸の類）我が君を逐ふ。我矛を拔て下て挌て還る子か我か公孫悁いはく子なり子夏いはく子の勇我に若ざること

三なり。北宮黝万乗の君を刺すを視る褐夫を刺すが如し。寔
に酷是に肖たり。故にいはく北宮黝は子夏に似たり。
桓石虔は趫捷絶倫にして敵人を威鎮せし時に瘧を患る
ものあれば謂ていふ桓石虔きたると以て此を怖れさすれ
ばたちどころに愈ゆ。又刘胡は面黝黒にして胡に似
たり。蠻人此を畏る。小兒啼ば刘胡来ると語つて止し
む。楊大眼は威淮泗荊沔の間に振ふ。童兒の啼くときは呼て
曰楊大眼即ち止む。將軍麻秋威名あり。兒啼ば輒て麻秋
来ると呼ば即ち止む。檀道濟は雄名おほいに振ふ。魏にて

ありしかば是を憚りて圖して以て鬼を禳ふ。江南の
人は桓康を畏るその名を以て小兒を怖させ瘧を
療する者は其形を寫して床壁に帖す。刘錡は隴右の都
護たりし時夏人と戦ひ屢勝つ。夏人兒あれば怖させて
曰刘都護来ると。耶律休哥于越の官に升て。数々宋の師
を敗る。宋は兵をして北に向ひし時に宋人兒の啼を止めんと
欲すれば乃ちいはく于越来る。于越は貴官なり大功徳あるにあらざれば授ず。遼史に見ゆ
此諸人の者その名を呼て兒を怖し病を已し圖形を以
て鬼を禳ひ瘧をいやす。その敵に臨んで決戦するも

當て向とさ縁披靡せるを想ふのみ。西天の釈迦佛ハ嘗て磨休王たりし時皮を剝て紙となし髓を斮て墨となし。大乗經を寫せり唐の法師楚金ハ堯氏按ずるに則顔魯公の多寶塔の碑を見て其人を知るべし血刺して経を寫せり筆端つねに舎利ありて楚金の刺血も豈皮を剝ぎ髓を斮るの遺意あるか。今此經を寫すもの多く血を以て筆に泚ぐ者あり。是ハ至心を表せんと欲し血濺いて汚を成せ則ち以て褻るとせんか經を尊ぶ者恐らくハ必しもしからざるなり。筆の人を以て名を得る者ハ張芝なり著る墨ハ人を以て名

を得るものハ韋仲將李廷邽ハ著る紙の人を以て名を得るものハ張永義右軍の用ゆる所蔡侯倫左伯子邑謝公箋十色薛濤李氏澄心堂ニ著る蕭子良の王僧虔に答るの書にいふ子邑の紙ハ妍妙にして輝光あり仲將の墨ハ一點漆の如し伯英の筆ハ神を窮め思を尽せりと能書家を兼て此を用ひんと欲せバ韋仲將魏の人名ハ誕いはく張芝が筆と左伯が紙と及ひ臣が墨を用ひ此三具を兼ねて臣が手を得て後に徑丈の勢方寸に千言を尽すべし。また歐陽通詢の子なりみづから能書に矜て。かならず象牙犀角を管と為し貍毛を心となし覆ふに秋毫を以てす。松煙を墨となし麝香を

加へ紙をかみしぎ緊薄白滑なるを須ひて乃ち是に
書せば豈事を善する者ハすなハち先づ器を利するなり。
張蒼ハ人の乳を食して寿なりき。史記に張蒼相を免されて後老て口中歯なし。乳を食し女子ハ乳母となり妻妾百を以て数ふ。かつて孕むものハ復幸せず張蒼の年百有餘なり。候君集も亦人
の乳を服して誅せらる。隋唐喜話にいはく候君集を反するを以て誅に伏すその家を録すに二人の美人を得たり。太宗その状を問ふ美人いはく君集迩きころより常に人の乳を食して其余のものは食らはず。
舜平陽に糴す。真元の賦に見えたり糴とハ米を搬ぶなり 牛を濮陽に牧す。公孫尼子に出 羊を
黄河に飲ふ。公孫弘の言 諸難を試み歴る事。尭典本文 蓋し河濱
雷澤 史記 のみ舜の跡有るにはあらず。

道を治るものハ射箭の如くあるべし箭を直して往て
顧ず朔的に至ることを得る志を操て道を學ぶもの亦直
に往て疑ざれば的を破ること何ぞ難からん、
圖畫胡のさかまに変じて石氏 東晋の時僭偽の国趙と号す 以て滅す。崔鴻十六国春秋後趙録にいはく石虎大武殿を造りて初て成る圖畫に古の賢聖忠臣孝子烈子貞女みな変じて胡の状になりしも旬餘にして頭ことごとく縮んで肩の中に入て只冠幘のるいのみ髣髴として少しく出づ石虎みるに是を悪む。
金像毛を生じ
廣陵 南北の時魏の節閔帝の事 廃せらる。洛陽伽藍記にいはく普泰元年洛陽の金像毛を生ず眉髪ことごとく皆そなはる晋の哀帝の末僭国の張天錫このとありて其国ついに滅す此不祥の徴ありと當時魏季景いへる事あり。明年に至て廣陵廃せられて死す。
實に癡なり実に昏なれば終に身を保ち世に存することを

得る。魏昏玉 疑が傳 瞽あれども聾あらず。家翁とあるはいへのあるじ
慎子 淵の魚を察し見るものは、信なり不祥なるを知る。尭民
按ずるに此事はあまり物をさぐり求ぬをよしとするとの意あり。
此言を文子并に韓非子に出て、史記呉王濞列傳に引用せり。
劉偉道 漢の時の人なるべし 仙を嶓冢山に学ぶ。仙人白髪を以て十萬
斤の石を臥所に懸るものあるに偉道心安く體すゝまず費
長房道を壺公に求む。壺公朽索を以て万斤の石を心上に
懸る。ものあるに長房此が為に移らず。尭民按ずるに神仙上界は楽事而已奢侈に超過するのみならず
まことにこれを求むるあり。しかるにかくの如く苦行艱難なれば帝王さへ
のしみを舎て求むべき謂もなし。神仙ことより寓言なるべし。
て此なりといふ言すこし寓言なり疑なし。

杜預常にいはく高岸谷となる深谷陵となると。よりて二
碑をつくりて、其勲績を紀し、一を万山の下に沈め、一を峴山
の上に立つ。いまゝいづくんぞ知らん。此の陵谷となら
ざることを。晋書本傳 後顔真卿もまた姓名を石に刺し或
高山の上に置き或は大洲の底に沈む。そもそも安ぞあらん
丘陵の変はらざることを。傳記 二公も身後の名を好む事如
此卒に各不朽に竪故にいはく三代よりしもの下士名
を好まざるを恐る。尭民按ずるに此言は利を好むに對していふ名を好め
ば、おのづから鄙吝の心をはなれて、施舎する事はあまり
勉励して事功を成就する事となり。論語に名の称せられ
ざるをにくむとあるも別て深き意あるべし。

子産鄭國を治て、梟鳥なし。母を食ふといふ悪鳥なり。梁冀別傳 生ながら梟鳥王ならで子産鄭を治て蒺藜しげれる 王業荊山をあさむるときは豺狼なし。捜神記 王業荊州の刺史となりて山に豺狼なし。

叔敖は沃壤（古地のよきをいふ）の封を辞し、蕭何は窮僻（よき地なり）の郷に就て唐瑾は境埆（石ある田）の地に留ることよく子孫長久の計ことをなせしものなり。

獬豸は人の闘を見ては則ち不直なる者に觸る。人の論を聞ては則ち不正なるものを咋ふ。東方朔が神異經 象なき人の訟ゆるを見て行て立ちて是を嗅ぎ理ある者をさるなり過ぎ心

ずし負ものは必ずこれを擲て碎に至る。朝野僉載 人のも亦これを
なれ。仁人を能く人を好悪すと大学に見ゆる是なり。又
一物なれ。人の徳行ある人を往て是に抵觸せ凶悪の人には
往て此に依憑を名づけて渾沌といふ。人の闘を聞けば
直なるものを食ふ。凶悪不善を聞ば輒ち獣を殺
して此に餽る名づけて窮奇といふ。神異經 人にもまたこ
れ有て悪を好んで人の性に拂るものこれなり。堯民按ずるに渾沌窮奇。もと左氏傳に見へたるより此説を作為せしまた寓言なるべし
宋の呉璘の蜀を制せるときは殺金坪（地名）の草深く繁茂せるを

とらへ敵その間に匿さんとあらんとせしかば。是を焚
んとせし忽ち一嫗ありて子を携へて轅門に至て一日の焚ことを
緩せんと求む呉璘これをのゝしりてさらしむ嫗いわく必ず
我を殺せ我よく尓を族せん呉璘の卒火を縦ちて山を
焚く明日大蛇の長け数丈小蛇の数多く煙焰の中に死
せるを見る黒氣あり東南より去る此より璘の子曦
うまる後呉璘金爵の命をうけ蜀王に封ぜられ竟に
誅せられて死せり。江湖紀聞○尭民按ずるに明の方孝孺の祖にも又
此事あり孝孺も靖難の軍によりて一族百餘人誅
死せらる

漢
れ薄姫（文帝の母なり）の魏宮にあるとき許負是を相していはく。天
子を生べし。魏王豹許負の言を聞心に喜び因て漢に
背く中立を曹参等豹を虜にし薄姫を織室に輸す。
後ち高祖姫に幸して文帝を生む。五代の宣懿皇后符
氏初め李守貞の子崇訓に嫁す守貞も漢に事て河中
の節制として己に異志を挾む。術者ありてよく人声を
聴く后の聲を聞て驚て曰これ天下の母なり。守貞
ますく自負して反せるに決す。漢より周の太祖郭威を
して此を討破らしむ崇訓自殺す。後ち世宗郭榮符氏を

以て皇后とせ。大都術家の禍福を言。達者あらく視て風を捕へ影を繋ぐとせ。然るに迷ものぞ。輙ち此に憑て妄心を起せ。魏豹の薄にせしを守貞の自殺せしを見て。能おもひ恐るべし。故に君子は術者の言を信ぜずして。理を見ること徹なり。

冀缺が夫婦あひ待すること賓の如くにして。晋に仕ふることを得たり。許州の富人夫婦も相待すること賓の如くして。其死を免るることを獲たり。詩にいはく寡妻に刑して以て家邦を御む。易にいはく家を有つに閑て悔ひ亡ぶ。こゝも是の謂なるべし。左傳曰李使して冀を過る。冀缺が耨しその妻これに饁する。敬して相待すること賓の如きを見て臼季これとゝもに國にかへる。文公にいふて下軍の大夫にせしむ。五代史萇從簡いさる所潜に民間の小兒を捕て食ふ。許州の富人に玉帯有て此を欲すれども得べからず。二卒を遣し夜るその家に入て殺して此を取しむ。卒夜る垣を踰て木の間に隱る。その夫婦を見れば相待すること賓の如し。二卒歎じて云吾公その寶を奪と欲して此人を害せしむ。吾らなんぞ免すべしと因て躍つゝいでゝ告げ速に帯を以て獻ぜしむ。遂に垣を踰て去る。

元の時歌妓の時秀色藝ともに超絶なり。學士王公元鼎深くこれを愛眷す。時秀疾で馬版腸を得て饌に充んことを思ふ。王公騎る所の五花馬を殺して腸を取て此を供す。君子の曰妾を以て馬に換へ馬を殺して妓に媚る。

皆情の正にもあらざるぞ。〈後魏の曹彰性質倜儻にして道なく駿馬に逢ふ此を愛す。その主の惜むと強ふ。〉いはく余に美妾あり換べし只君の選ぶにまかせん馬此主因て一妓を指さ曹彰つひに此に換号して白鶻と名づく因て猟して此を文帝に献す。

京口の某なるもの家に一鶏一鳧を畜ふ客至て鶏を殺て此を食んとす。鶏忽ちに窟匿る大いに索れども得ず主人庵者ふりとて曰以て鳧に代べし語訖て鳧翅を鼓さて床の下に入てより中く探てこれを出す。主客相向て嗟異し。遂に両ながらこれを中る後銀山の僧に送て此を畜しむ。鶏の必ずしも生を逃るらんと欲し。鳧の死に代るを欲せず。此人情と豈相違うらん

や。客の享するその客の為に鮮を撃ざるはまた客の為に福を惜むの意なるべし。

滕元發〈道達〉いはく一の醫を善するもの云本艸薬物白書するもの此を服して験多し。蘇子容〈名頌〉いはく黒字ある後人此を益す醫家本艸を閲するもの。先つ黒白を別と紀と則幾ろ。

管仲酒を桓公に飲しめていはく臣その晝をトして其夜をトせず〈左傳〉晏子酒を景公に飲すあるいはく己にその日をトして。いまだその夜をトせず。談ずる者

管晏を畀とせざるハなし則二子の君に違て従ざること一轍の如し。いまだ少とせべからざ。堯民按ずるに晏子春秋後人の偽作なり管仲の事を移して景公の時の事となれしもるなり疑なし。

大海に溺をなくさるを怨て木石を銜て以て是を填む。猶これ海に損なし。精衛木石を以て海を填む。溺を死さるを怨りしなる。河水の濁るを憂て泣て以て是を清む。猶これ河に益なし。子思りふ費子陽宗周の滅せんとするを憂なりて涕泣しくみづから禁ぜざ。

世人趙孟頫子昂の其書畫を知るのミ。元史を閲るに始て其文章政事を兼て観べきを知る故に史よりわ

く其の詩畫を知る者ハ其文章を知らず其文章を知るものは其經濟を知らず。禮にいはく藝なりて下なり。傳にいはく伎成て則いやし。人一藝を以てみづから掩ざらんや。堯民按ずるに明人の子昂が画く山人ずし題する詩に如此青山深樹底可無二十畝種瓜田と作りしハ趙氏の同姓にして元朝に仕るを諷刺せる絶調にして三百篇の餘意有といふべし。

金履祥仁山先生その弟子に語ていはく士の斈をなすも五味の和するが如し醯醬をもて加へざれば則醎酸ところ異なる。斈の人に益あることかくの如し。

蒲公子ハ八歳にして舜の師となる。高士傳 項橐ハ七歳に

しそ。孔子の師となる。（国策 新序）師は少長を則せずして聞道を期す。その論なきは何ぞ必ずしも黄髪のみならんや。（尭民按ずるに是傳記の妄説あり皇甫謐が書信ずるにたらず。項槖の事は甘羅の口中より出づ。是をまた齊東野人の説なるべし）疑ふべし。

朱買臣（前漢の人）は孜々として孝を修め雨の粟を流す。知らし（太平御覧鄒子を引）高鳳（後漢の人）は竿を持て經を誦し雨の麥を流すを知らず。古人の孝に篤きこと斯くの如し。

唐人鄭潜曜は母の疾に値て。血刺して奏章（道家の説に天に告るを奏章といふ）を書し。身を以て代らんと請ふ。奏章を焚に

およんで独り神道許の三字化せず。明日母の疾いえたり。潜曜駙馬都尉の貴戚にして至性かくの如し。世此貴顕の人に風するに足れり。

民の為に福を祈る者聖壽延長の四字声空中に聞ふ。（唐の天寶四年に黄素文を道場に撰ふ民の為に福を祈る其文天に飛上りて空中に云云）親の為に代らんと祈るときは神道許の三字何ぞ焚後に留む。（鄭潜曜前に見ゆ）仁孝の感天に通ずるの速かなる事桴の鼓に應ずるが如し。

李舎光書を善くす或はいはく筆跡その父に過たりと一たび此語を聞て終身書せず。謝安王献之に問て君が書は

家尊は何ん答へいはく故より同じからず安いはく外人の論ずるを示らず。答ていわく人なんぞ知ることを得ん王子敬は書を攻して其親に勝ん事を求んと欲す。李舎光は親に勝ことを欲せずして筆を輟る事至る。二子の心を操る同じからずして。父に勝んことを求るは非といふべし。堯民按ずるに周易父の蠱に幹たりの聖語あり。又有子克家抔とも見ゆ父の不及を補るの意なるをまに孝道の一なり能押とふべき事なり

世の人銭の孔兄なるを知りて王老と称せるを知らず。唐の玄宗かつて王元寶を召してその家財の多少を問ふ對ていはく臣請ふ絹一匹を以て陛下南山の樹を繫がば樹を尽して臣が絹はいまだ窮せず錢

[illegible]元寶の字あるに因て錢を呼て王老となす。

伊尹此戮に就くと紀。大霧三日とあり。およそ抱朴が竹書の妄を踵るなり。信ずるにたらず。唐の李鍔乃誅せらるるのと紀。大霧ますます三日にして開かず。按ずるに旧唐書に鍔恩を受て驕て恣ままなり。罪狀いつならんは。三日の霧も或は天いかりて然らしむるものか。武成の篇にいはく牝雞をして晨（ときを作る）せしむるは家の索る。唐の文明（唐の豫王文明の年号なり則天の時なり）天下の諸州雞の牝変じて雄となる者を進る極て多し。又則天初て誕るの夕べ雌雄とも

みな雖も唐家の牝晨の禍なり偶然なるらんや
天后の時三足の烏を献ずるものありしに左右なるいは言ふ一
足ハ偽のみ。天后わらひて曰但し史冊に是を書さ
しむ。いかんぞ其真偽を察ちんや是より此を推
だ史冊の霊徴を志し符瑞を紀せし実を以てせざること
の多し。
玄宗即位のはじめ曽て酔中に一人を殺せしおりよりの
杯を覆して四十年かつて酒味を嘗ず。そこで玄宗ハ醇
徳の主にはあらずとして昔より國を享ること長久なる

事その匹なくなし。是はその一念生を好み殺を悔る
の致す所なるを知るべからし。
則天の朝時の人語りて曰徐有功杜景倹。時の賢人に遇ふものは必ず
生き来俊臣侯思止（周興来俊臣と此類の人酷史なるを）に遇ふものハ必ず死す。
君子いはく鷹鸇鸞鳳は固よりその性をのせる。（堯民按ずる了此語を）
後漢書仇鸞の傳にもとづく。
有夏氏土に任じて貢をなさしむ（禹貢）徐州のその貢とするにて土五
五色孔安国傳に王者ハ五色の土を封じて社を為す諸
候を建るときは各その方色の土を割きて是を與て

社を立しむ壽は黄土を以てし苴ふ白茅を以てし茅ハその潔を取る黄ハ王者の四方を覆ふ取る後周の時宣帝五色の土を以て御する所の天徳殿を塗るおのく方色に隨ふ徐州の貢ハ遂に人主の麗を極め奢を窮るの資となりて土を封じ社を建る意をさみたり

談鋒資鑑巻之上終

第百四十七号